

「pity」(哀れみ)ではなく「compassion」(慈愛)からの贈与

日向敦子

「家の入口の戸は葎だった。」 札幌近郊の在村地主の娘だった母から、昔話の折に、当時の小作人の暮らしぶりを聞くことがあった。気候は今よりずっと寒く、機能性が高く暖かい衣服もないような時代で、暖房も満足にないような家で、どのように厳冬期に過ごしていたのだろうか。

有島武郎は、第一次世界大戦後の不況で、困窮を極めた小作人に対して農地解放を行ったという。彼の行為は、当時は非常識ともいえる利他的行為だっただろう。中島岳志によると、利他には、支配的関係になりがちな「pity」に対して、「compassion」があるという。(※1)

「今、苦しんでいるその人」は、もしかしたら自分であったかもしれない、今の自分であることは何かの偶然からかもしれない、という可能性に目を向けることが、「compassion」に結びつくのかもしれない。有島武郎の「農場解放記念碑文」からは、「compassion」の眼差しが感じられる。

「農場解放記念碑文」には、小作人たちに分け与えた土地を共有地とすること、そしてお互いに協力し合い助け合ってほしい、とあるが、せつかく与えた土地が早々に借金の返済に回ってしまわないように共有地とただけでないだろう。水や空気と同じように土地も共有として耕作し、恵みを共有することで、どうか共存共栄の道を開いて行って欲しい、優劣貧富を競うのではなく。有島武郎はそう言いたかったのではないか。

共有地が乱獲されてしまう「コモンズの悲劇」とならず、農地解放の対象となるまで、このニセコにおいて、共有地が大切に維持管理されたのは、有島武郎の精神を当時の人々が受け継いでいったからではないだろうか。

考えてみれば、今の私たちも、すでに多くのものを受け取っている。自然の恵みや先人たちの営為があってこそ、この豊かな生活がある。また、この社会のネットワークの中で、どこの誰とも分からない人から情報や知識を得たりして、知らず知らずのうちに助けられていることも日常的にある。だから、自分がいま在ることに感謝し、この社会を、さらにより良いものにして、後世につなげていかなくてはならないのだと思う。

※1 『「利他」とは何か』 伊藤亜紗編 集英社新書